

災害伝承と防災教育(1)： 静岡市における民話「沼のばあさん」を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2024-03-14 キーワード (Ja): 災害伝承, 沼のばあさん, 妖怪, 防災教育, 麻機, 巴川 キーワード (En): 作成者: 小川, 日南, 藤井, 基貴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000270

災害伝承と防災教育（1）

—静岡市における民話「沼のばあさん」を事例として—

小川日南 藤井基貴

(静岡大学大学院教育学研究科) (静岡大学学術院教育学領域)

Disaster Lore and Disaster Prevention Education (1)

A Case Study of the Folktale "Granny of the Swamp" in Shizuoka

OGAWA Hina, FUJII Motoki

Abstract

The purpose of this paper is to summarize the results of a field survey and analysis of the Shizuoka City folk tale "Granny of the swamp" and to examine its potential use as an educational tool for disaster prevention. Various teaching materials have been produced on the folk tale "Granny of the swamp" in the past. However, not all of them were created from the perspective of the history of disasters. In this study, we analyze the perspective and context of "Granny of the swamp" in order to decipher it as one of the folk tales of disasters, and examine the possibility of using it as a teaching material.

キーワード：災害伝承 沼のばあさん 妖怪 防災教育 麻機 巴川

1.はじめに

日本の歴史は自然災害と常に隣り合わせであった。各地における災害への備えや対応は減災・防災の知恵として語り継がれ、近代以降にあっては地震学、気象学、地質学、土木工学、建築学といった自然科学・工学分野の目覚ましい発展とともに、独自の防災文化が生み出されてきた。あわせて、近年では人文・社会科学の分野において災害史の見直しをはじめとして、災害時や復興時における人々の心性や動向に焦点をあて、教育啓発に活かそうとする研究も進められている。

日本における民俗学の創始者である柳田國男は有形文化だけでは見えてこない過去の人々の営みや知恵を無形文化である「伝承」に着目して掘り起こしたことで知られる。その系譜は防災・減災の研究にも活かされるところとなり、今日では地域に伝わる災害伝承や民話（昔話や伝説）の中から当時の人々の防災意識を読み解こうとする「自然災害の民俗学的研究」（野本、2013）が徐々に広がりを見せている。本研究はその一端をなすものであり、本論文では静岡市に伝わる民話「沼のばあさん」に関する現地調査・分析をもとに、防災教材としての活用可能性について検討する。

まず、本研究を始めるきっかけとなった新聞記事について紹介したい。2023年5月4日、静岡新聞は静岡県松崎町小杉原に伝わる「大蛇伝説」を扱った動画制作の取組について報じている。『松崎町史資料編 第4集 民俗編 下巻』によると、かつて松崎町の大池に大蛇が棲んでおり、その大蛇が峠道を往来する人々を困らせていたという。あるとき大蛇の退治に向かった甲州（山梨県）の男性が大蛇に飲み込まれると、その娘姉妹が敵討ちにのぞみ、見事弓矢で大蛇を討ち取った。

射られた大蛇は巨石に挟まつたまま息絶えたという（松崎町町史編さん委員会、2002）。現在では娘姉妹が願掛けをしたという神社に竜のモニュメントが設置されたり、大蛇が息絶えた「蛇ヶ狭」（じやばさま）の巨石所在地の確認が行われたりするなど文化財・観光資源として活用が進められている。松崎町小杉原をハザードマップで確認してみたところ、集落がある地域は標高100メートル程度ではあるものの、周囲は急峻な地形に囲まれており、広域にわたって土砂災害警戒区域に指定されている。松崎町が位置する伊豆半島では他にも大蛇にまつわる伝説が残されている地域があり、それらは火山噴火や土砂崩れなどの自然災害の痕跡として伊豆半島ジオパークの構成資産として数えられてきた（伊東市史編集委員会、2013）。松崎町の大蛇伝説もまた災害伝承の痕跡の一つとして読み解きうる側面を有していることも考えられる。そこにはまた大蛇伝説が語り継がれてきた経緯やその意味を問い合わせ契機も含まれているだろう。

大蛇が池から暴れ出て、山を下るという伝説は全国的にも数多く残されている。「蛇抜け」や「蛇崩れ」などと呼ばれ、土石流や地すべりなどの土砂災害の記憶と共に各地で語り継がれてきた。また2018年の西日本豪雨の後に注目されたように、土砂災害のリスクがある土地には、かつて「蛇」が地名に含まれることがあったことなども知られている。歴史学者の笹本は長野県木曽郡南木曽町における「蛇抜け」の伝承を詳細に分析して、同地が洪水や土石流の頻発地域であったことを指摘し、「蛇抜け」の伝説が災害と深く結びついていたことを明らかにしている（笹本、1998）。また、二本松（2021）は笹本の問題意識を受け継いで、

浜松市天竜区で民間口承文化財（昔話）の採録調査を行い、『北遠の災害伝承—語り継がれたハザードマップ』をまとめて、伝承のなかに潜む自然災害と共に暮らしてきた人々の心象風景を描き出した（二本松、2021）。近年では災害伝承を新たな教材として活用しようとする取組も進められている。高田・近藤（2019）らは地域社会に根付いてきた「妖怪」文化に注目し、「妖怪安全ワークショップ」と題した防災教育プログラムを開催している。また、町田（2019）は、火山灰や水害を克服してきた阿蘇地域の自然と人々との関わりに関する伝承を教材化した。両者ともに身近な災害伝承を活用することで児童生徒の防災への興味関心を喚起しやすいことを成果として報告している。2023年夏、名古屋市港防災センターにおいては「妖（あやかし）と自然災害—あいち なごやの妖怪伝承」という展示企画を実施し、妖怪伝承を活用した防災啓発も行っている。市民からの反響も大きかったという。

本論文では静岡市麻機地区において語り継がれてきた民話「沼のばあさん」の伝承を調査対象とする。「沼のばあさん」については2024年2月時点において静岡新聞データベースでは過去56本の記事が確認でき、これまで紙芝居、絵本、演劇、人形劇などさまざまな形態で教材化が図られてきた。ただし、前述の「大蛇伝説」と同様に必ずしも災害伝承として教育活用されてきたわけではない。そこで静岡県内の他の伝承や、他県における沼に関する伝承とも比較することで静岡市麻機地区に伝わる「沼のばあさん」の特徴や災害伝承としての解釈可能性について検討してみたい。

2. 静岡県における災害伝承

静岡県における伝承・民話のなかから自然災害と関わりがありそうな主なものについて表1として示す。これらの災害伝承については類型として大きく二つに区分することができる。第一は当該地域において起こりうる自然災害を示唆したハザードとしての役割を有しているものである。もう一つはそうした自然災害から免れるセーフティ（安全装置）を示す役割を担っているものである。

前者について言えば、前述の大蛇伝説なども該当する。また妖怪の「河童」は水害や水難のリスクを表象するものとしても知られている。本論文で取り上げる静岡の民話「沼のばあさん」においても河童が登場する。また、舞台となる巴川水系の下流にあたる清水区の巴川稚児橋でも河童伝説があり、橋には河童の像が設置されている（写真1）。巴川稚児橋は過去に幾度となく水害がおこった地域にあり（巴川流域総合治水対策協議会、1981）、2022年9月に静岡を襲った台風15号でも周辺地域の被害は甚大であった（静岡新聞、2022）。柳田の整理に従えば、河童はもともと「水の神」であったものが零落して妖怪になったものとさ



写真1 巴川稚児橋の河童像（筆者撮影）

れ、河童への人間の対応はそのときどきの人間社会の在りようを反映しているという（柳田、1968）。

このことに関連して妖怪学者の小松は柳田の議論を批判的に継承しつつ、科学的・合理的な思考で捉えきれないものに対して、これを超越的・非科学的説明体系のなかに組み入れて秩序づけようとするところに民俗的思考の特質があると指摘する（小松、2015）。小松によれば、人間社会にとって好ましいとされる存在は「神」とされ、またいたん好ましくないと判断された「妖怪」でも、後になって神へと転化することがあるという。こうした神や妖怪をめぐる民俗学的な理解は災害伝承の教材化においても重要な視点となる。

また、後者のセーフティについては要石が挙げられる。要石とは大きな災を封じ込める役割と担うとされる巨石のことであり、2022年の公開映画『すずめの戸締まり』でも災害を連想させるモチーフとなった。要石は有形とはいえ、災害伝承を顕在化させる象徴として各地に存在している。全国的には茨城県鹿嶋市の鹿島神宮、千葉県香取市の香取神宮、三重県伊賀市の大村神社、宮城県加美町の鹿島神社の四カ所が有名である。類例として静岡県沼津市には地震の原因とされた鯰を大きな石で封じめたところに建立された要石神社がある。同地の要石は実際に過去の大地震においても津波の被害を免れる境界上にあるという（静岡県、1996）また、静岡市内には清水区の鹿島神社に要石が安置されている（写真2）。



写真2 静岡県清水区の要石（筆者撮影）

表1 静岡県内の主な災害伝承¹⁾

伝承・妖怪	表象	出現場所	内容	類型	災害種
河童伝説	河童	静岡市 巴川	慶長十六年、家康の命令により巴川に橋を架けた。渡り初めの式を行おうとする時に、水中から奇児が現れ、府中（静岡）方面へ向かって橋の上を歩いて行ったという伝承。	ハザード	洪水 台風
要石	石	静岡市 鹿島神社	地中に深くに根を張っており、この石はどんな天変地異にも微動だにしないという伝承。	セーフティ	地震 津波
沼のばあさん	大蛇 河童	静岡市 麻機地区	おばあさんが大蛇に姿を変えて、孫娘をさらった河童を退治し、沼を守るために沼の底に消えるという伝承。	ハザード	洪水 土石流 水難事故
鬼ヶ島	鬼	富士市	吉原村田中の田んぼの中に鬼ヶ島があった。ここには鬼が沢山棲んでいて、畑の作物を取ったりして荒らして村人を苦しめた。その後、村人たちは鬼を退治したという伝承。	ハザード	噴火
柳沢の法螺貝	法螺貝 大蛇	沼津市	柳沢の渓間に怪物が棲み、風雨の夜は必ず唸り声が聞こえる。ある年、嵐が訪れ天地が震動した。人々によれば柳沢の法螺貝が川を下り、風雨を起こして海に入ったという伝承。	ハザード	台風 土石流
一碧湖の赤牛	赤牛	伊東市	一碧湖に赤い牛が棲んでいて村人が船に乗って渡ろうとすると、船を覆したりして苦しめた。寛文年間、光榮寺の住職日広上人が、湖の中の小島に立って、七日間祈祷を続けて、赤牛を封じ始めたという伝承。	ハザード	土石流 洪水
晴明塚	石	掛川市	陰明師安部晴明が遠州灘の津波に幾度となく苦しむ村人たちの訴えを聞き、小豆色の石を集めて塚のようなものを造った。晴明が津波防止の祈祷を行ったことで津波の被害がなくなったという伝承。	セーフティ ハザード	津波
波小僧	波小僧	遠州灘一帯	漁師が釣り上げた波小僧を海に戻してから、天候を波小僧が海鳴りで知らせてくれるようになったという伝承。	ハザード	台風 洪水
新宮池の大蛇	大蛇	浜松市 天竜区	長者の娘が田んぼでレンゲの花を摘みながら遊んでいた。そこに大蛇が現れて娘を攫ってゆく。起きた村人たちが大蛇を退治すると、大蛇はその地を暴れて出て行った。そして田んぼは池になったという伝承。	ハザード	土石流 土砂崩れ

静岡市防災情報マップの津波ハザードマップで確認してみると、要石のある場所は津波浸水想定区域を免れたところに位置していることが確認できる（図1）

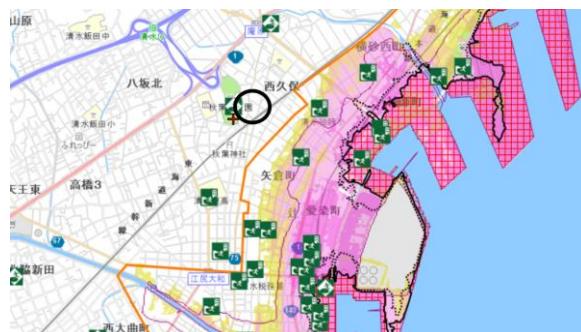


図1 鹿島神社（※丸印）とハザードマップ

3. 全国の「沼に関する」伝承の事例

静岡市の「沼のばあさん」の特質について検討するために、国際日本文化研究センターが公開している「怪異・妖怪伝承データベース」に「底なし沼」を入力して得られた全国の五つの伝承について以下に抜粋した。残念ながら現時点においては静岡市の民話「沼のばあさん」の情報は収録されていない。

①姉とり沼（宮城県登米市）

昔、北方の大田河囲に姉取り沼という沼があった。底なし沼といわれ、得体の知れない主が棲んでいたという。そのほとりに住む美しい姉妹がある時沼に洗濯に行って、姉の方が沼の主に攫われ、亡骸さえ上がらなかつた。それから「あね取り沼」というようになった。こここの上手の山沢を化け物沢といい、昔から怪異の事があつたといふ。

②スイジンボッコ（福島県いわき市）

細長い足跡の形をしたスイジンボッコという田は底なし沼である。

③ドンコ（愛媛県伊予郡）※カワアナゴ

底なし沼ドンコが池には大きなドンコがいた。ある日、背中を出して休んでいたのを、男が捕らえて峠の道を歩いていると、人の気配はないのに人の声がある。聞くと「ドンコさん、ドンコさん、どこい行くんぞな」と言う。すると背中のドンコが「余戸割木で背唄りに行くのよ」と答えた。男は驚いてドンコを放り投げて逃げ帰つた。

④蛇（長野県伊那市）

じんがの下に住んでいた医者が、村人の栄養不良を憂えてねずみなど捕って動物性たんぱく質をとるようすすめた。するとその家の老爺の夢に蛇が現れ、

自分たちの餌が無くなるから止めろと言つた。しかし止めなかつたところ、医者の息子が蛇に底なし沼に引きずられそうになつた。助かつたが、その日の夢に蛇が出て今度は「止めないと皆殺しにする」と言つた。村人は蛇を退治することにして、護摩を焚き觀音を頼むと、蛇が雲を引いて舞い上がつたといふ。後に医者の老爺は亡くなつたといふ。

⑤蛇（長野県伊那市）

村には底なし沼があり、村人が捕つて食べたので沼の辺りには蛙などがいなくなつた。あるとき、医者の息子が何者かに引きずられしていくのを見、村人たちは慌てて助けた。引きずつていった蛇は沼に飛び込んだ。その日の夢にまた蛇が出て、「底なし沼」に引きずり込んで食おうとしたが失敗した。これ以上食い物を捕つていくようなら医者の家を皆殺しにする」と言つた。

情報に不足はあるものの上記①から⑤から伝承内容と構造について確認しておこう。①と②については沼の主については説明されていないものの、③はカワアナゴであるドンコ、④と⑤は蛇とされている。また、「底なし沼」伝承の構造に着目してみると、伝承に含まれる要素として次の三つが共通している。第一は、すべての伝承において、底なし沼が災禍の中心的舞台として登場すること。第二は、それぞれの伝承で、底なし沼には主が棲んでいるとされていること。第三は、その主は人間に対して害をなしたり、警告を発したりする役割を有していること、である。また、「底なし」の類例としては他にも池、田、滝壺、井戸、淵などの14例が確認できる。「底なし」を含む伝承の特徴として共通するのは、落ちてしまつたら戻ることのできない危険な場所や地帯（ハザード）を暗示していることである。①で挙げた「姉とり沼」の伝承では、実際に沼に滑り落ちてしまった子どもが実在した可能性もあり、2016年7月に宮城県大衡村大衡天姓院の沼で3人の転落死事故が発生している（日本経済新聞、2016年）。「底なし沼」の伝承は過去に起こつた水難事故への警鐘として繰り返し語り継がれてきたことによって現代にも教訓を残している。

一方で、これらの伝承は時代や文脈の変化によって、新たな解釈や意味が与えられる可能性も有している。伝承の役割や意義を検討するにあたつては、伝承の原典に立ち返ることも重要ではあるが、そうした伝承がどのように語り継がれてきたのかという受容史を紐解き、災害史との関わりともに検討していくという複眼的な分析も必要となるだろう。

4. 静岡市における「沼のばあさん」の事例

「沼のばあさん」の舞台となる麻機地区は静岡市の北東に位置し、巴川の上流域にあたる。低湿地であったため大雨の際には広域にわたって水がたまりやすい地形にあり、周辺には沼も多く存在し、たびたび巴川の水害にもみまわれた地域であった。近世以降の新田開発や20世紀後半における交通及び水路・圃場の整備事業によって現在では周辺地域の景観は一変し、かつて存在した「浅畠沼（大沼）」と呼ばれる大きな沼の面影をたどることも難しくなっている（安本、1974）。

このような土地であったため地盤も緩く、水田農業には適さなかったと言われている。その代わり沼では水中に木の枝葉を沈め、そこに集まった魚を網でくう「柴揚げ漁」と呼ばれる独自の漁法で漁業が営まれ、沼にはハスが育ち麻機レンコンという特産品も生み出された。しかしながら、湿地の造成事業は巴川の遊水

機能を支えていた沼地を減少させ、1974年の「七夕豪雨」では巴川の決壊とともに静岡市内に甚大な被害をもたらすこととなった（静岡県、1996）。この豪雨を契機として1978年より巴川上流に位置する麻機地区で多目的遊水地事業が始まり、あわせて大谷川放水路の整備が進められることとなる（巴川流域総合治水対策協議会、1994）。

こうした歴史にあって、「沼のばあさん」は麻機地区の沼にまつわる水害、水難への警鐘として、また自然の恵みや共生についての視点も含めた物語として人々の間で語り継がれてきた。その起源をたどる詳細な記録として『駿河国新風土記』『駿河記上巻』『静岡県史話と伝説』『麻機誌』の記載内容を表2に示す。

表2 「沼のばあさん」の伝説に関する記載内容

① 駿河国新風土記（1831）
大蛇伝説 沼の側なる山にありて、此沼の主なる老婆の靈を祭りて、諏訪の神を合祭ると云、古の説に日、東村の民、彦左衛門、石橋氏と称、觀応年間、其祖先に老婆ありて孫女小吉と云るが十六になりけるとき、川合村の辺りにて水に入て死す、この沼に住る水神のとれるなりと聞て、其老母も此沼に入て、生ながら大蛇となりて、其邪神を追ひ退けて、ついにこの沼の主となる、其水に入る時誓をなして、吾この沼に身を投て、邪神毒魚を退治して、此沼の主となり、人の横死を救ふべし、また此池より一千人の食を出して、諸人の飢を助べし、と云て沼中にいりしより、其翌年稀なる靈草を生ず、一本の草、其長二十四方にはびより、葉の大さ壹丈あまり、蓮の如にして茎には、ばらあり、その実、鞠の如し、中を割てみれば棕の実の如きもの、一つに百八づ、あり、其実、沢山なる故これをとりて土中に埋め、腐らかして皮をさり、朝夕の食とす、又その実を糸に貫きて、富士禪定の人の珠数とす、其名を法器草とも鬼蓮ともいふ、応永年中、有度郡大谷村に曹洞宗の明師に石叟円柱禪師の弟子、行之正順禪師と云僧、瑞現山大正寺を開て其寺に住す、一日一人の老女來りて法を求む、行之其老女の凡ならざるを見てその来由を問、老婆則ち浅畠の沼に住者なりと云、則ち菩提戒の血脈を授く、老婆大に感涙を流して此寺の守護神となりて火災を護べしと云、此寺三百余年火災の患なし、当山護法清竜法蓮智泉神女と号しと崇めて寺の鎮守とす、此寺の住僧入院のとき必ず出池に血脈を送り授ること例なり、後、此池の打なる小山の上に古き社のありしを造営を加、諏訪の社として是を祭る、道雄日、以上の説は浅畠池由来と題したる此國の俗のもてあそぶ草子ありて、僧の近き世に記したものにてとるにもたらぬ物ながらなべて言伝ふことなればその要をとりて愛には記したるなり、その行之に逢しことはいかどあらん、今に此社の靈なること世の人しれるところなり。
② 駿河記 上巻（1932）
諏訪神社 祭神 老婆女之靈なり 池の端につき出たる森の中にある。俗説云、昔脇屋源義助朝臣駿河守に任じて建武中當國に入部の時に、廬原郡瀬名村の長が娘小菊と云美魔の少女を召して愛せられたるが、程なく世の亂にて西國に趣く。小菊孕むことありて一女子をす。小菊産後三日にして歿す。温母深くこれを欺き悲み、小菊がわすれ形見とて孫女を小吉と名け撫育して憂き年月をぞ送りける。然るに勧應二年卯七月祖母六十歳なりしが、中暑を煩ひ死に至らんとす。孫の小吉女大に驚き、佛神に祈書をかけ、祖母が病の平癒を祈らんと家を出で、國府の淡間神社に参るべしとて川合村を越むと巴川を渡る時、河伯の為に水底に死す。祖母この告を聞より悲歎に堪かねて終に麻機池に身を投す。其靈龍神となりて河伯を取殺し、此池中に栖と云。後世其靈を齋て諏訪の神と崇め祭ると云云。野史に云。背聖武天皇の御朝、天平年中震旦の僧鑑真來朝。當國の國分寺に住する時、龍爪山に常に瑞雲たなびきて、天龍守護の奇瑞あることを奏し、此所に壇を築き、秘法を修して天竺無熱池の水を結び、此所を池となし、天龍守護の休游池と成しけると云云。是等は俗説にして信用なしといへども、古き傳なればこゝに記す。

③ 静岡県史話と伝説(1956)

今から六百年のむかし、新田義貞の弟の脇屋義助の軍勢と、足利尊氏の弟、左馬頭直義の引いる二万余騎の大軍とが、安倍川の西岸、長田区の青木・寺田のあたりで大合戦をした。此時に麻機の岩崎藏處国隆の子、修理之時光が五百余騎を率きいて義助に味方をし、ついに義助の方が勝ち、足利の軍勢は鎌倉へ退いた。

義助は岩崎国隆の屋敷に入つて休息し、時光の手柄をほめた。時光の姉の秋野は、瀬名の十郎忠本の妻であるが、此日、十七才になるその姫の小菊がここにきておつた。義助はそれを見て大へん気に入つて寵愛し、八日間も滞在した。小菊は義助の胤を懷妊し、父の家に帰るとやがて女の子が生れ、小葭（こよし）と名付けたが、産後の肥立ちが悪くてお産してから三日目に死んだ。それから間もなく父の忠本も娘の小菊の後静を追つて死んだ。後に残つた祖母の秋野は、重なる不幸せの中に生れたばかりの孫の小葭を母に代つて育てた。秋野の手厚い養育によって小葭はすくすくと成長した。気立てもやさしく、亡き母の小菊にもまさるうつくしい娘となつた。祖母の秋野が六十才、小葭が十四才の夏、暑さにまけたのか秋野は病気になつた。小葭は心配し、夜昼熱心に看病したが、病気はだんだん重くなるばかりだつた。此上は神や仏の力におすがりするより外はない。と思つたので、麻機の伯父岩崎時光にも知らせ、賤機山の麓の浅間神社にお参りして、祖母の病気を治おしていただくようにお祈りしてこよう。と、下男を一人つれて川合の渡しで舟にのり、川の中ほどまで進んだ時、とつぜん川の水はにごりを立ててうずを巻き、何やら怪しいものが現れ、アレヨという間もなく小葭は水中深く入れられた。下男と渡し守りは驚ろいて「カツパだ、カツパだ」と大声を上げて助けを呼んだ。村の人達は大勢集まり舟を出して探したが、小葭の姿は見えなかつた。秋野は病の床でこれを聞いて氣を失うばかり驚ろいた。そして小葭の亡くなつた所へつれて行つてくれといふので、人々はよんどころなく重病人の秋野を川合の渡しにつれて行つた。秋野は人々にむかつて、「わが瀬名氏に重なる不幸も宿縁によるものと、あきらめようが、憎いカツパはこの婆が退治で、沼の守り神となり村人のなんぎを救います。また沼から千人の食物になるものを恵むことに致しましょう。」といふ終ると、高らかに念仏を称えながらザンブとばかり川の中へとびこんだ。驚いた村人が沼を探したが老婆の死がいは見付からなかつた。あくる年の初夏、麻機沼には今まで見たことのない草が生えしげつた。それがお盆の頃になるとうす紅色の花を沼一面に咲かせた。村の人人がその根を堀取つて食べてみるとおいしかつた。又その水草の実も食べるられることを知つた。村人は秋野の魂しいが、この草を生やしたのだと信じた。そして村人は川合の渡しで大施餓鬼をして、不幸な秋野と小葭の靈を慰めようとした。その時大せいの坊さんがお経を讀んでいると、急に川の水は激しく渦を巻き、泡立ち、にごり、何物かが水の中で戦かつてゐるようであつた。それからこの川でカツパに殺される者がなくなつたので、村の人々は秋野婆さんが、お経の力でカツパを退治したのだ、というようになつた。又、その時水が出のよううずを巻いたから、此川を巴川と名付けたのだともつたえられる。大谷の大正寺には、秋野が残した鱗が数枚宝物として保存されているといふ。又、沼上の諏訪神社は、俗に沼の婆さんといわれ、そのお祭りは大そうにぎやかである。尚秋野の生れた岩崎家は、今でも麻機の東村に栄えている。

④ 麻機誌（1979）

600年ほど昔、足利直義の二万の大軍と、新田義貞、その弟脇屋義助の軍とが手越原で戦ったことがあります。あさはたの岩崎藏人国隆とその子理乃介光は500人のけらいをひきつれて義貞の軍に加わり、この活躍によって見事直義の陣をうち破ることができました。あさはたの国隆の屋敷で開かれた戦勝の祝いに招かれた脇屋義助は、ここで、国隆の親類の娘小菊を見そめ、すっかり気に入つてここ10日間も居続けたといいます。やがて小菊は義助の子を生みました。小葭という、色の白い愛らしい女の子でした。ところが、この小葭には、かわいそうな身の上が待つてゐます。お産の後がおもわしくなくて、まもなくお母さんの小菊が亡くなり、続いて、おじいさんもなくなつて、とうとうおばあさんと2人きりになつてしまつたのです。おばあさんは小葭をそれこそ目の中に入れても痛くないという様子で大切に育て、やがて小葭はまたとなく美しい娘に成長しました。小葭が十六、おばあさんの秋野が六十を迎えた観応2年の夏のことです。おばあさんは暑さに負けたのか、どつと床について、それなり日いちにちと身体は衰えていくばかりでした。小葭は、一心に看病を続けましたが、もうこうなつては神様におすがりするほかないと、沼の向こうにある浅間さまへ願をかける決心をしました。100日間毎日欠かすことなくお参りに通いつめるのです。ある日、いつものように渡し場の吉兵衛に船を出してくれて、お参りに出かけました。夕陽が水面に、きらきらと散つて、その中を小舟はゆらゆらと進んでいました。その音に驚いて水鳥が芦の上を低くかすめて飛び去り、その後に、ゆっくりと水の輪がひろがっていました。池の中ごろまで来た時のことです。ざわざわと水音が立つたと思うと、舟のまわりには激しい波が起つて、舟はゆれさかまいて小葭のからだは、たちまち水の中にのみ込まれてしまつました。そしてその一瞬のうちに、何事もなかつたようにすべては静まり、顔色を失つた吉兵衛を乗せた小舟がゆるやかに

ゆれているばかりだったのです。このことを聞いたおばあさんは、かわいい子葭はきっと沼の魔物にさらわれたに違いない、憎い魔物をなんとか退治してやろうと床から起き上がり、よろけるからだを沼のほとりに運んで、小葭がさらわれたと思われるあたりに自分の身を投げてしまいました。100年ほど経てから、この話を聞いた大正寺の僧、行之正順は、ふびんなことよと沼のほとりに立っておばあさんの供養のためにお経を読みました。ところが読み始めて間もなく、水がざわざわとうず巻き立ち、中で何かが激しく戦っているようでしたが、やがてこれが静かになると、沼の中から1匹の大蛇がうかび上がってきたのです。村の人たちは、おばあさんが、行之和尚のお経に助けられて、ついに魔物を倒したのだとうわさしあいました。おばあさんの戒名は、清龍院法蓮智泉神女、今は沼のほとりに諏訪大明神として祭られています。大谷の大正寺には、この時の大蛇のうろこが数枚残されているばかりか、沼の婆さんの像まで作られているのです。さて、これがあさはたに伝えられている「沼の婆さん」の物語です。

それぞれの資料に記されているとおり、麻機地区に伝わる「沼のばあさん」の伝承は、孫をさらった沼に棲む魔物あるいは河童をおばあさんが退治した物語として語り継がれている。加えて、魔物・河童がいなくなった沼には、その後に「法器草」と呼ばれるスイレン科の水生植物「オニバス」が育ち、村人たちはその実や根を食べて飢饉の際もしのぐことができたという。

本研究の調査で訪問した静岡市葵区の大安寺住職によれば、魔物・河童を退治した沼のばあさんは鎮守様と呼ばれる地域を守護する神に転化したと解されており、大安寺だけでなく、諏訪神社にも祀られ7年に1回の周期で「沼のばあさん」を祀る大祭が執り行われている（写真3、4）。



写真3 沼のばあさんを祀る大安寺（筆者撮影）



写真4 沼のばあさんの図像（筆者撮影）

では、民話「沼のばあさん」は災害伝承としてどのように読み解くことができるであろうか。第一の視点として「沼のばあさん」は水害に関するモチーフが随所にちりばめられていることが注目される。水の神とされた河童、水害や土砂災害をあらわす竜、水害の象徴としての蛇。これらの存在は日本における災害伝承でたびたび現れる共通点である。『巴川治水沿革誌』によると、巴川は上流の浅畠沼から河口に至るまで、「其の間流身蜿蜒迂曲し、其の川幅水面勾配及流身の屈曲の度等不規律にして一様ならず」、「一朝暴漲の際は河水處々に停滞し、熟田を荒廃し、浸水家屋三百八十九戸の多きに及び、或いは堤防の決壊を来すこと年一再に止まらず」と記されているように、水害が繰り返された地域でもあった（巴川水害予防組合、1930）。上記のとおり、巴川の流路は蛇行しており、川幅や水面の勾配が異なるため水流が一定ではなく、大雨が降ると川の水がいたるところで停滞したり、農地が被害を受けたり、多くの家屋が浸水することが多発してきた。さらに、堤防の決壊にもたびたび見舞われてきた（図2）。こうした歴史は現在の巴川流域整備の機運を生み出し、明治40年（1907）に着工された巴川の改修工事では、曲流の直線化を中心に進められ、現在の巴川の流路の完成にいたっている。

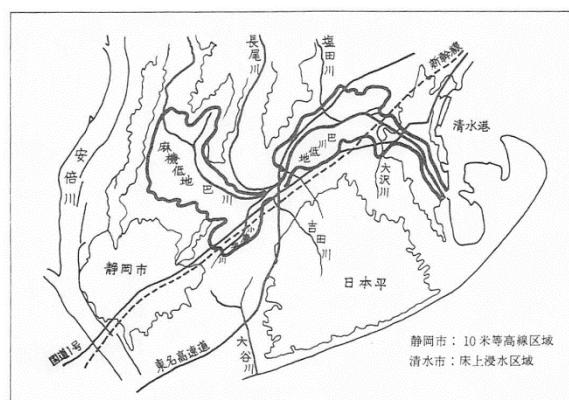


図2 麻機低地の周辺地図 出典『麻機誌』

加えて、語り継がれてきた民話「沼のばあさん」において、河童は悪さをする存在者、水害や事故などを

誘発する存在者として描かれ、ばあさんに退治されることで沼の平穏がもたらされるように物語が構成されている。そこに当時の人々が抱えていた不安や恐怖を心象風景として読み取ることもできるだろう。

第二の視点として「沼のばあさん」の民話は麻機地区にあける水難事故への警鐘を鳴らす役割も果たしてきたということが挙げられる。麻機地区には数多くの沼があり、沼地は子どもたちの格好の遊び場でもあったという。全国に伝わる「底なし沼」の伝承と比較しても、(1)沼が中心となる要素として登場している。

(2)沼には主が棲んでいる。(3)主が人間に対して害をなしたり、警告を発したりする役割を果たしている、という構成要素が含まれている。孫娘をさらった河童は沼のばあさんに退治されていなくなり、沼地には新たに法器草が育って、人間に恵みと平穏をもたらした。沼のばあさんは神へと転化し、神社やお寺で人々にあがめられるようになる。この物語が語り継がれてきたことはまた、子供にとっては沼地に近づくと河童にさらわれるかもしれないという教訓話として、また日常に潜むリスクを回避し、良い習慣づくりへと教育啓発に役立てられてきたと考えられる。

第三の視点は、民話「沼のばあさん」とその伝承にあっては自然との共生の思想が織り交ぜられてきたことが挙げられる。民話の舞台となった沼は、静岡市を西から東へと蛇行する巴川の上流にある。かつて「浅畠沼（大沼）」と呼ばれたその沼は、西と東を賤機山や竜爪山、南と東を安倍川と長尾川の扇状地に囲まれた低地に位置した。また、『麻機誌』によると、その周辺には浅畠沼だけでなく、小沼、武平淵といった沼地が散在していたという（図3）。麻機地区は、水はけが悪く土地生産力の低い地域であった。沼の周辺には「あさばた七天神」が祀られ、洪水などの天災から農地を守り五穀豊穣が祈願されてきた。

民話では共通して魔物・河童が退治された後、沼にはオニバスが生え、それを地域の人々が「法器草」と呼び、人々は食糧にしたと説明されている。オニバスは家庭排水や肥料の流れ込みによって、やや富栄養化した堀や農業用のため池など人工的な環境に生えやすい水生植物である。現在、ため池は宅地化や工場の建設などによって水田とともに減少しており、法器草も絶滅が危惧されているという。水のある環境が埋め立てられず生育可能な環境が回復すれば蘇るという特徴を持つ法器草がこの民話の結末で登場することは、この物語がなおも語り継がれる要点をなしている。

浅畠沼は1940年頃（昭和30年代後半）から食糧増産を目指した土地改良事業などにより、水田として整備され、徐々にその姿を消した（安本、1974）。そして1974年（昭和49年）の七夕豪雨を契機に、洪水時の推移を下げるため水田から遊水地への整備が始まっ

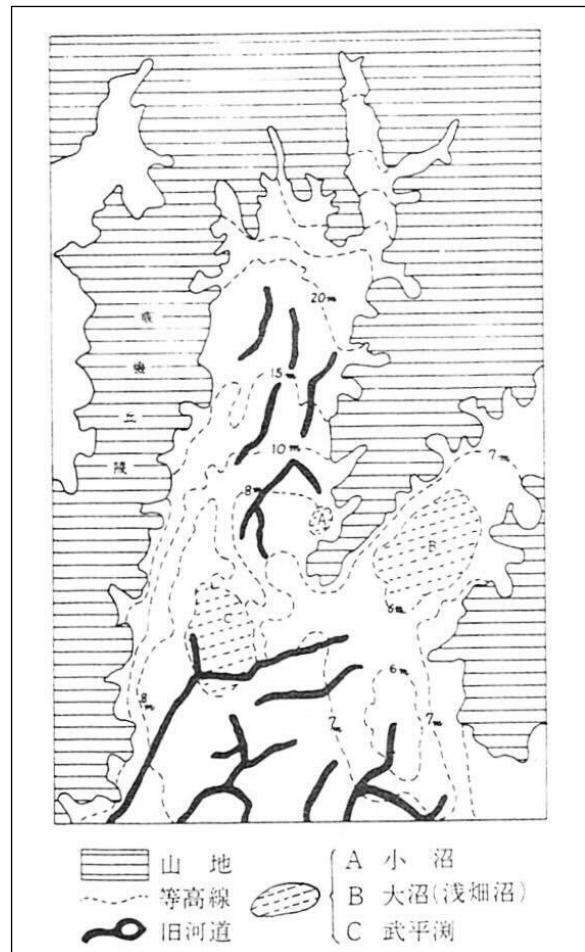


図3 麻機低地における沼の位置 出典『麻機誌』

た。このような歴史を経て、遊水地が整備されたことで、麻機地区には湿原性の植物が蘇り、さまざまな種類の生物が戻っている。その過程にあって、麻機地区では「沼のばあさん」を共鳴板として地域の治水、水難、環境について話し合いや座談会が重ねられてきた

（静岡新聞、2015年）。静岡市議会においても民話「沼のばあさん」は巴川流域の治水対策事業に対しても推力を与える物語として活用されている（静岡新聞、2015）。このことはまた民話が伝承されることによって備えるナラティブ・アプローチとしての社会的機能を示すところであるともいえよう。

5. おわりに

本論文では、静岡県における災害伝承および全国にある「沼に関する伝承」を概観するとともに、静岡市の民話「沼のばあさん」の伝承を分析し、防災教材として活用できる要素が含まれている点を明らかにした。

静岡県における災害伝承を概観したところ、災害伝承には災害への警告を発するハザード機能と安全を伝えるセーフティ機能があることが確認された。また、全国的に沼に関する伝承には、自然災害への警鐘機能だけでなく、水難事故を予防する啓発機能も認められ

た。また民俗学的な視点に立脚すると、災害伝承に登場する妖怪や神といったものは、人間社会に対して超越的な存在者として、人間の心性や社会のあり様を映し出す鏡としての役割を果たしている。したがって、伝承が語り継がれることで、それぞれの時代の課題も投影され、伝承の価値変化が生み出されるところとなる。民話「沼のばあさん」にあっては「法器草」をはじめとした自然との共生の視点が付帯していることによって、今日にあっては環境教育やSDGsといった題材を扱う教材としても役立てることができるだろう。

このことは同時に、災害伝承が時代や文脈の変化によって、異なった解釈や新しい意味を持つようになることへの留意を喚起するところとなる。伝承は口承によって次々と語り継がれる中で、新たな要素が加わり、元の文脈が失われることもある。この変容によって、そのときどきの語り手や聞き手の解釈や認識が変わり、本来の伝承の背後にあった意図や史実がねじ曲げられてしまい、誤った伝承がなされている可能性も課題として指摘されなければならない。

その一方で、伝承を通して災害の記憶をたどることは記録として残されてない過去の自然災害にアクセスする通路となる可能性も有している。また、こうした研究が蓄積されることで災害と向き合ってきた日本文化の深層や心性が明らかにされ、新たな防災文化の創造へと接続されることも期待できる。妖怪や神の物語を通した「自然災害への民俗学的研究」はまだ途に就いたばかりである。今後も地域に語り継がれた伝承や民話に注目し、その教育活用への可能性や課題について検討を重ねていきたい。

脚注

- 1) 図1を作成するにあたっては以下の文献を参照した。
なお、静岡県内に伝わる伝承は多数あり、本図を作成するにあたっては、その一部を紹介した。伊東市史編集委員会(2013)『伊東市史別編伊東の自然と災害』伊東市。小山有言(1994)『駿河の伝説』羽衣出版。静岡県(1996)『静岡県史別編二自然災害誌』静岡県。静岡県女子師範学校郷土研究会(1934)『静岡県伝説昔話集』静岡谷島屋書店。二本松康宏監修(2021)『北遠の災害伝承』三弥井書店。宮内卯守(1982)『伊東の民話と伝説』サガミヤ。

参考文献

- 飯塚伝太郎(1956)『静岡県史話と伝説』松尾書店。
伊東市史編集委員会(2013)『伊東市史別編伊東の自然と災害』伊東市。
桑原藤泰(1932)『駿河記 上巻』加藤弘造。
小松和彦(2015)『妖怪学新考』講談社学術文庫。
笹本正治(1994)『蛇抜・異人・木靈—歴史災害と伝承』岩田書院。
笹本正治(1998)「災害文化と伝承—長野県小谷村の

土石流災害と伝承—」『京都大学防災研究所年報』41号B-2、63-75頁。

静岡県(1996)『静岡県史別編二自然災害誌』静岡県。

静岡市“津波マップ”防災情報マップ
<https://www2.wagmap.jp/shizuoka-hazard/Portal>
(参照2024年2月15日)

静岡市議会自民党議員団編(2015)『巴川流域総合治水対策』。

静岡新聞(2015)「麻機地区の伝承紹介」2015年3月23日朝刊。

静岡新聞(2015)「巴川水害の歴史紹介」2015年4月9日朝刊。

静岡新聞(2022)「清水駅前商店街が浸水」2022年9月25日朝刊。

静岡新聞(2022)「巴川流域浸水最大で2メートル超」2022年9月30日夕刊。

新庄道雄(1831)『駿河国新風土記』。

新庄道雄(1975)『修訂駿河国新風土記』国書刊行会。

高田知紀・近藤綾香(2019)「妖怪伝承を知的資源として活用した防災教育プログラムに関する一考察」『土木学会論文集』75号、20-34頁。

巴川水害予防組合(1930)『巴川治水沿革誌』巴川水害予防組合。

巴川流域総合治水対策協議会(1981)『巴川流域の浸水実績 昭和49年7月7日—8日洪水』巴川流域総合治水対策協議会。

巴川流域総合治水対策協議会(1994)『巴川流域七夕豪雨二十年誌』静岡土木事務所。

長島昭(1976)「浅畠沼とその周辺」『静岡地学』32号。

日本経済新聞(2016)「沼に転落し父子3人死亡 宮城、夕方から釣り」2016年7月2日
https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG01HDS_R00C16A7000000/ (参照2024年2月15日)

二本松康宏監修(2021)『北遠の災害伝承 語り継がれたハザードマップ』三弥井書店。

野本寛一(2013)『自然災害と民俗』森話社。

畠中章宏(2017)『天災と日本人—地震・洪水・噴火の民俗学』ちくま新書。

町田怜子・北里美有・下嶋聖・金子忠一(2019)「阿蘇地域における自然と人との関わり・伝承を取り入れた熊本地震後の防災教育プログラム開発」『ランダスケープ研究』82巻5号、521-526頁。

松崎町史編さん委員会(2002)『松崎町史資料編 第4集 民俗編 下巻』松崎町教育委員会。

安本博(1974)『麻機誌』麻機誌をつくる編集委員会。

柳田国男(1968)『定本柳田国男集』4巻、筑摩書房。

横山俊夫(2013)『達老の時代—古いの達人へのいざない』ウェッジ選書。

謝辞

本研究にあたっては静岡市立図書館麻機分館の小林様、麻機村塾の石上恭平様、森健様、静岡放送の坪内明美様よりお力添えをいただきました。記して感謝申し上げます。